

「見えないものに目を注ぐ」

(マルコによる福音書 3 : 20 - 35)

悪霊を追い出す主イエスのことを、身内の人々は「気が変になっている」と言い、律法学者たちは「あの男はベルゼブルに取りつかれている」「悪霊の頭力で悪霊を追い出している」などと言いました。身内も、律法学者たちも、イエスという人間が奇跡を行ったことは認めています。主イエスの真実の姿を見誤っています。身内という関係性、律法学者という権威的立場、いずれも人の目を曇らせるものの象徴といえます。人は身内のこととなると世間の目や評判に影響されやすくなってしまふことがあります。また、権威の象徴でもあった律法学者たちは、自分たちの権威が脅かされないようにイエスという男を評価しなければならなかったのでしょう。立場や関係性のなかで、人はかくも簡単に目が曇ってしまいます。人の目を曇らせるものでもっとも身近なもの、それが母や兄弟姉妹、つまり家族と言えるかもしれません。だからこそ、主イエスは「神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」と言われたのです。この言葉は、文脈無く聞くととても非常識であり、冷徹な言葉のようにすら感じられるものです。しかし、よくよく考えればこれはとても愛情深い言葉です。ある人にとってこの言葉は解放の言葉に他ならないでしょう。日々の虐待のニュースを見れば、血縁的な家族に囚われて、どれほどの人が、ことに子どもたちが苦しんでいることか容易く想像できます。主イエスはそのような血の家族に囚われるのではなく、わたしたちが神に結ばれることで神の家族、それはすなわちすべての命を祝福なさった神に繋がれた家族であり、命を祝福し合う家族にされているのだと告げているのです。もちろん、このことは血縁的な家族関係を単純に否定しているわけではありません。それが大切なものを見つめる目を曇らせるもの、それこそ神の祝福から命を尊さを奪うものであってはならないと告げているのです。それゆえ主イエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と問いかけ、人々の目を曇らせるものに気付かせようとなさったのです。

今日の使徒書でパウロが言うように、わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注がなければなりません。今日の福音書では、「目に見えるもの」がいかに大切なことを見えなくしてしまうのかを知らされます。主イエスはその働きを始める時に洗礼を受けました。この時、主イエスに聖霊が降り、その聖霊が主イエスを導き、そして主イエスは奇跡を行います。主イエスを導き、その働きを支えたのは、目に見えるものに囚われていては見えない霊の働きだっ

たのです。わたしたちも目に見えるものにばかり囚われ、目に見えない聖霊の働きに目を注がなければ、主イエスとは何者なのか、そして大切なものは何かすぐに見失ってしまいます。教会暦は長い緑の期節に入りした。この期節は、主イエスと旅を共にし、主イエスを横から、後ろから見つめ、また様々な表情を知る既設です。その始まりにあって、わたしの目は主イエスを見つめているだろうか、その目を曇らせているものがあるのであれば、それは何だろうか、あらためて確認しましょう。そして、この暦をイエス様と共に歩んでまいりましょう。